《熊本県美術家連盟主催》

# 美術講演会

平成26年11月29日（土）
熊本県立美術館・本館（講堂）

◎演題　「エコール・ド・パリをめぐって
　　――藤田嗣治とジュール・パスキン、一九二三年のパリ――」

◎講師　村上　哲　先生　熊本県立美術館学芸課長

今回の美術講演会は、熊本県美術家連盟に一昨年より設けられた「美術理論」部門の委員で、熊本県立美術館学芸課長の村上哲先生にお願いいたしました。皆様ご存知のように、先生は東京藝術大学美術学部の御出身で一九八二年から熊本県立美術館学芸課に勤務されて、県立美術館では西洋美術分野の学芸員としてこれまで多くの展覧会を企画・開催して来られました。今回「生誕百三十年記念　ジュール・パスキン展」が開催中でもあり、また近年、新しい作品や資料を発見・紹介され、注目を集めている藤田嗣治（レオナール・フジタ）のことや二人の関係など、一九二〇年代のパリで活躍した画家たちのことを、最新の研究成果等を含めてお話していただく貴重な機会となりました。

＊

ここでは「エコール・ド・パリをめぐって」というタイトルで、現在当館で作品展を開催しているジュール・パスキンと、昨年企画・開催し全国六会場を巡回した「レオナール・フジタとパリ」展の藤田嗣治を中心に話をしたい。当館は二年後には開館四十周年をむかえるが、三十周年の時に開催したのが「エコール・ド・パリ展」だった。また、「エコール・ド・パリ」と聞くと、これまでは二十世紀前半の「パリで活躍したメランコリックな絵を描いた異邦人の画家たち」というイメージが強いが、最近では新しい捉え方や日本であまり紹介されていない事柄もあるということがわかってきたので、そのことも含め「一九二三年パリ」というところを掘り下げてお話をしたい。

＊

まず、舞台となるパリ。セーヌ右岸のモンマルトルに一九〇〇年にピカソがやってきて、五年後にはパスキンが、次の年にはモディリアーニも来て、一九一〇年にはキスリングが、十三年には藤田嗣治（ふじたつぐはる）が日本からやってきた。その後は、アポリネール、モディリアーニが死に二三年には海老原喜之助がパリに出て、三十年にはパスキンが自殺、その後はナチスの台頭そして第二次大戦へと歴史が動いていく。この時代は、大きな二つの大戦の間の華やかな時代と思われているがそうでもない側面もある。パスキンは、九十年前には、パリの寵児と言われていた。パスキン、藤田、モディリアーニの三人はとても年齢が近いが、パスキンと藤田は年齢差が一歳半でもっとも近く、お互いに親しかった。

「エコール・ド・パリ」の画家たち。藤田、モディリアーニ、パスキン、シャガール、キスリング、ピカソ（初期にはピカソもその一員とされていた）、…。彼らはほとんどが一八八〇年代の生まれで、ピカソの強い影響下に仕事をすすめ、一九二〇年代に全盛期を迎えた。今年は第一次世界大戦が始まって百年目だが、ヨーロッパの人々から見ると第一次大戦は自分たちが作り上げた機械文明が国や文化を破壊していくという戦争だった。その悲惨な出来事を忘れようとした時代が一九二〇年代だった。

ロートレックやピカソが活躍し始めた頃は、セーヌ右岸（北岸）のモンマルトルが舞台だった。そこの地価や賃料が高くなって、まだ安かった左岸（南岸）のモンパルナスに芸術家が集まってきた。「蜂の巣」と呼ばれるような狭いアパートがモンパルナスに多く造られた。藤田は一九一三年にパリにやって来たが、二～十二歳は熊本で過ごした。奥さんだったユキの回顧録によると「フジタは、熊本に眩しいような思い出があり、自己を形成したのは熊本だ」と言っていた。一九六〇年に熊本市稗田町に記念碑が建てられて時にはとても喜んだと伝えられている。

三年前、調査中に発見した渡仏前の小さい印象派風の風景画、一九一二年の《三保の松原》でT・FUJITAとサインがあった。Oがないサインは日本で書かれたもの、藤田はフランスへ行ったら、FOUJITAと書くようになる。一九一三年六月十八日に日本郵船の三島丸で横浜を出発、八月五日にマルセイユに着き、翌六日にリヨン経由でパリに到着した。最初はホテル・オデッサに、その後シテ・ファルギエールのアトリエ兼住居へ。ここで最初の妻である鴇田登美子に宛てて沢山の手紙を書いている。その中に「ルーブルで模写ができるようにしてもらった」とか、「ルーブルでクラシカルなものを勉強した」や「新派の画家ピカソに会った」こととかが書いてある。また「自分が描く絵は、日本的なものではなく、西洋的なものでもない」とも書いている。一九一六年鴇田と別れ、次の年フェルナンド・バレーと結婚しシェロン画廊と契約。水彩画を中心にした個展を二回開催する。ギリシアの壺絵風の人物に歌麿のような手足の異国風の作品。ピカソも個展を見に来て、丁寧に見ていった。モンパルナスにアトリエを構え、一九二〇年代になると乳白色の地に裸婦を描くようになる。その裸婦は、ヨーロッパの伝統的なヴィーナスの系譜に従っている。多くのすぐれた画家たちの作品やルーヴル美術館の彫刻室の作品などにあるヴィーナスなど、ヨーロッパの形式を取り入れている。藤田が優れているところは、まず研究熱心、お酒を飲めず、夜に外で騒いだ後も、アトリエに戻ったら熱心に研究し、絵を描いた。東京国立近代美術館の《五人の裸婦》にもギリシャ・ローマのヴィーナスの「型」を使っている。そして、同じく五人の裸婦を描いたピカソの《アヴィニョンの娘たち》を明らかに意識している。スペイン生まれのピカソは、異文化（アフリカの仮面など）を取り入れ、東洋出身の藤田は、戦略的にヨーロッパのものを取り入れている。この二点には、二十世紀前半に際立ってくる東西の文化の交錯がみられるのである。

＊

次に、ジュール・パスキン。藤田と違って戦略的なところがなく、ナマな自分というものを出していったので、不幸な結末を迎えたのかもしれない。ブルガリアで生まれ、ドイツを経て素描家としてパリへ出て、マティスの影響を受けた油彩画を描いた。パリでフォーヴ風の色彩を学び、アメリカに渡りキュビスム風の形の解体をやり直して、第一次大戦後のパリに戻ってきた。その後、画面から色数を少なくして、線を強調するような作風となる。藤田やキスリングなどと違って、パスキンは自分の出自を捨てて、不要なものをそぎ落としたような表現をしている。その中から、人間の儚さ、愛おしさが伝わってくる。造形的には、明らかにセザンヌの影響がみられる。最後は自殺した。原因は、まず破滅型の人間だったこと。次に一九二八年にパリの画廊と専属契約をしたが、それが負担だったらしい。さらに、リュシーをめぐる人間関係の悩み、これらが重なって自殺したのではないか。一九三〇年六月二日パスキンは死に、その翌日の朝、パスキンの死をまだ知らない藤田は《死に対する生命の勝利》という不思議な作品を描きあげている。

「一九二三年のパリ」。一九二三年春のアンデパンダン展で、それまでアルファベット順に並べていた画家の名前を、国籍順に並べるようになった。それは、外国人を排斥するような風潮の影響だった。この年、批評家のロジェ・アラールがフランスの芸術を脅かす外国人の輩という意味で「エコール・ド・パリ」という用語を（「エコール・ド・フランセーズ」に対立する用語として）初めて使った。その二年後に批評家のアンドレ・ワルノーは、逆に良い意味で「エコール・ド・パリ」を使いだした。藤田が、一九二三年にヨーロッパのクラシックな伝統の「型」を使い始めるのは、このようなフランスの外国人を排斥するような空気を敏感に感じ取って、そのような展開をしたのではないかと考えている。

藤田とパスキンの対照的な生き方、県立美術館のコレクションで藤田やパスキンなどの作品を見ながら、今日のお話を思い出していただければ嬉しい。

（要約文責・井上正敏）